

## 「小さいけれど豊かな島のように」

鳥羽 克子

国際医療福祉大学医療経営管理学科 教授  
診療情報管理士教育委員会 委員

1994年に初めて訪れて以来、「屋久島行き」は私の日常をリフレッシュさせる大切な場になっている。鹿児島空港からわずか40分の距離にありながら、周囲132kmの小さな島の中に、野生の動物が生息し、また、たくさんの種類の植物が共生している。その中には島固有の植物も多く含まれ、在住の方から時々聞く、「亜熱帯から北海道の北限までの気候が、この小さな島に凝縮しているので、独特の風土と特異な生態系を生んでいる」と言う不思議である。

丁度、つば広の帽子を伏せたような島の中央には、九州最高峰でもある日本百名山の一つ、宮之浦岳（1,935 m）が、あたりを圧して聳え、その周囲を1,000メートル級の山々が数多く囲み、緑深い森を形成し、複雑で神秘的な景観を見せてくれる。小さく、ひっそりと佇むこの島が「洋上のアルプス」とか、「東洋のガラパゴス」とか言われる所以である。

豊かな自然は突然の訪問者をも裏切ることなく、訪れるたびにゆったりと包み込むように迎え入れてくれる。そして、島を去る折には何時も、「また、近いうちに尋ねよう」と思わせる。

さて、私たちの働いている、あるいはこれから目指そうとしている医療の現場はどうだろうか。訪れる人々（患者／受療者）を、裏切ることなく、訪れるたびにゆったりと包み込むように迎えているだろうか。

受療者の中には、自分の疾病や治療に対して、しばしば大きな不安や、時には苦痛を味わう場合がある。こうした不安や苦痛が、適正な診断や的確な医療行為の結果であれば、受療者は一人で最後までこれを受け止めていかなければならない。困難な治療や複雑な処置を受けるためのジャッジや選択も、それが正当なものであればこれを自分で決断し、甘受しなければならない。

しかし、そのような時に、医療従事者はその受療者の気持ちにどこまで向き合い、どのように受療者に添えられるかが重要になる。

私たち診療情報管理士は診療記録の中からはしばしばこうした苦痛や不安を汲み取る場合がある。

しかし、時にはそれは医療情報が十分伝わらないために、あるいは歪んで伝えられているために、増幅させてしまったりする場合もある。診療情報管理の仕事は、情報の歪みや誤り、または不完全な情報伝達が生じないように、情報を正すこと、守ることも大切な作業であること、そして常に日々の作業でそのように心がける必要がある。それが、結果的に受療者に添うことになる。

突然の訪問者（受療者）をゆったりと包み込むように迎え入れ、訪問者（受療者）が目的（医療行為）を完了し、島（医療機関）を去る時に、「次もここを尋ねたい」と思えるような、そんな穏やかで心和む環境作りと、有機的な医療機能を持ったシステム作りや工夫を、医療情報を提供する立場から提言、支援していけるような、そのような診療情報管理士を目指したいものである。

「木を見て、森を見ず」のような医療従事者にならないために……。